

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

助産婦 (1996.05) 50巻2号:66～69.

無資格の産婆と助産婦の違い

松岡悦子



無資格の産婆と助産婦の違い

松岡悦子

旭川医科大学

現在、世界の赤ん坊の大半を取り上げているのはどのような人かご存じだろうか。それは助産婦でも医師でもなく、無資格の産婆である。世界全体で見れば、まだまだ無資格の産婆の活躍している地域は広範で、世界中の赤ん坊の約3分の2がこのような免許のない産婆の介助で生まれている。

日本では明治32年に産婆規制ができて以後は、免許持ちの産婆しか助産をしてはいけないことになったけれども、現実には昭和になってもまだ各地に無免許のトリアゲバアサンがいたようだ。日本ではお産の担い手は、無資格のトリアゲバアサンから産婆・助産婦（自宅や助産所）、そして医師（病院）へと移ってきた。

そこで今回は、これまでとは方向を変えて、無資格の産婆と現在の助産婦とはどう違うのかを比較してみたい。違って当たり前と思われるかもしれないが、でもなぜ「経験豊富でも無資格の産婆」ではいけないのか。助産婦をトリアゲバアサンと比べ、また医師と比べることで、現在の助産婦が手に入れたもの、逆に医療化が進めば失いがちになるもの

がもっとはっきり見えてくるような気がする。

ジャヒダ——バングラデシュの産婆

まずここで一つの例をあげてみたい。場所はバングラデシュで、産婆は無資格で53歳のジャヒダである。

ジャヒダが産婦に付き添ってから、もう6時間以上がたつ。産婦は経産で、しきりにいきんでいるにもかかわらず、いっこうにお産は進まない。ジャヒダは産婦を覆っている布を上げて、内診してみる。「これは時間がかかりそうだわ。子宮が出てきているから」とジャヒダがいう。私が「えっ」といってのぞくと、ほんとうにいきむたびにピンクのものが出てきている。「でも、これは大丈夫よ。陣痛が強くなれば、赤ん坊が子宮を押しつけて出てくるから」とジャヒダはいうが、私はだんだん不安になってきた。

外は日が昇り、真昼に近くなっても小屋の中は薄暗い。まだかまだかと思った近所の女性たちが入れ代わり立ち代わり見にやってき



ては、産婦のいきみに手を貸し、そのたびに出てくるピンクのものを指で中に押し込もうとしている。最初は洗面器に汲んだわずかの水に手を浸していた人たちも、水がすぐ血で赤く染まってしまうので、手洗いなどにおかまいなく、皆それぞれに手を出してピンクのものを押さえている。中に自分も産婆をやっている女性がいて、「こんなお産見たことない」としきりにいっている。

ジャヒダは、「私はこういうお産は前にしたことがあって、陣痛さえつけば下から生まれるのよ」と頑といい張る。私が「病院へ行ったら」といったことから、あちこちで女性たちが集まって、「これは病院へ行くしかない」「いや病院へ行ったら、お金はどうするの」といい合う姿が見られるようになった。産婦は「病院なんて行きたくない。行ったら明日から食べられなくなる」と泣いている。夫はその間、ひと事のように、小屋の外で黙ってその騒ぎを見ていた。

この出産は、結局私を捜しに来た医師が病院と連絡をとったために病院出産となったが、普通バングラデシュの農村では、病院出産は選択肢にないといっている。病院では陣痛促進剤を点滴しながら、ジャヒダのいうとおり自然分娩となった。子宮が出てきていたのではなかったのか。ジャヒダが子宮と呼んでいたものは、実は性器が下垂してただけで危険なものではない、と病院で診察した医師はいった。ジャヒダは病院でもずっと産婦に付き添っていたが、赤ん坊を取り上げたのは病院のまだ若い看護婦だった。看護婦が大きな声であちこち命令しながら、しかも恐る恐る赤ん坊を取り上げるさまは、手慣れたジャヒダの様子と対照的だった。

助産婦が手に入れたもの

この例から、無資格の産婆が持ち合わせないけれども現在の助産婦には備わっているものを考えてみたい。

まず、ジャヒダが子宮と呼んでいたものが実は性器だったという点について。ジャヒダをはじめ無資格の産婆は、医学的な解剖や分娩の生理について学んでいない。だからピンクのものが出てきたのを見て子宮と呼び、子宮が出かけていても、赤ん坊がそれを押しのけて出てくるから大丈夫だと考えていた。解剖の知識がないのは私も同じだったために、このピンクのものは子宮だと私も思い込んだのだが、もしそんなものが出てきているのならとても危険だと、私のほうは不安になっていたのだった。でもジャヒダのほうは、子宮という言葉が間違っていただけで、そのままでも陣痛が強まれば生まれるという判断自体は間違っていなかったことになる。

でも、もし今度ほんとうに子宮が出てくることがあったとして、ジャヒダはその「ほんとうの」子宮が前の子宮とは違うものだということがわかるだろうか。わからなかったら危険なことになる。解剖学やその他の医学的な知識がないということは、身体の各部や臓器の呼び方が近代医学と違うだけでなく、もし子宮と性器を同じ言葉で呼んでいるなら、子宮と性器を同じように扱ってしまうこともある。両者の区別が大して重要でないときにはそれでもいいが、そうでないときには危険だ。

次に、女性たちがしきりに「こんなお産は見たことがない」と困惑していた点を考えて



みよう。

無資格の産婆が頼りにするのは、「前に経験したことがあるかないか」だ。経験したことがなければ、どうしていいかわからない。そもそも産婆の技術を覚えたのも経験から、つまり見よう見まねで先輩（たいていは祖母や母）のすることを見て覚えたのである。たくさんのお産を扱うことで経験は豊富になり、若い看護婦のように恐る恐る取り上げることはなくなる。でも経験だけに頼るというのは、決まりきった対応をするということでもある。そうすると、異常産では決まりきったやり方では対処しきれないために、失敗する可能性が出てくる。

このような経験主義の限界を越えるためには、異常と正常を識別する目が必要になってくる。1つ1つのお産について、異常と正常を見極めようとする目をもつことが、経験主義を越えるのに必要な姿勢だろう。

現代の助産婦は、症例研究や文献を読むなどして、これまでに扱ったことのない例についても幅広い知識をもっている。経験しなくても知っていることは大切なことだ。現代の助産婦は知識を得ることでワンパターンでない識別する目を手に入れたのだと思う。

無資格の産婆のなかの失いたくない点

現代の助産婦と無資格の産婆の似ている点は何だろうか。

先の例で、産婦が病院へ行くことになった時点で、私はジャヒダが病院へ付いていっても取り上げられない以上一文にもならないから、家へ帰ってしまうものと思っていた。でもジャヒダは病院まで付いてきて、無事に女

の子が生まれるのを見届けて帰った。バングラデシュのような国では電話も車もないので、夜中にお産に呼びに来られれば、遠いところでも歩いて付いていくしかない。しかも産婦が貧しいので、お礼に何ももらえないこともある。それでも産婆は呼ばれば出かけていく。だから、人びとはたとえ無資格でも産婆には頼れると思っている。

ところが、これはバングラデシュとは違う国の話だが、同じ地域に医学教育をきんちと受けた免許持ちの助産婦が派遣されていることがある。異常であれば、産婆はその助産婦を呼ぶことになっているのだが、村人の話では、助産婦は呼んでもすぐには来てくれない、特に夜は起きてくれない。それに不在のことが多いので、結局、村人にとっては産婆のほうが頼れるということだった。

この話を聞いて、かつて日本の僻地で、異常があつて助産婦が医師を呼んでも、医師はなかなか来てくれなかったという話を思い出した。途上国の免許持ちの助産婦は、かつての日本の医師のようなものなのかもしれない。でも産婦にしてみれば、資格のあるなしよりも、いつでも必要なときにそばにいてくれる人のほうが信頼できるのだ。

もう一つ、途上国の産婆を見ていて気づいたのは、産婦の身体をととても大切に扱うことだ。例えばインドネシアの産婆は、子どもが生まれた後、子宮がもとの状態に戻るように、また母乳がよく出るようにと産婦の身体を丁寧にマッサージする。ところが資格のある助産婦は子宮収縮剤の注射を打つだけなので、産婦はやっぱり産婆を呼んでマッサージをしてもらいたがる。

こうやって助産婦を無資格の産婆と医師の



間においてみると、助産婦が手に入れたのは解剖や生理などの医学的知識、経験主義を越えることによる異常と正常を識別する目であり、失いたくないものは産婦にずっと付き添う姿勢、女性の身体への尊敬の念ということ

になるだろうか。助産婦が助産婦であることの意義もこのあたりにあるような気がする。

助産婦が女性のそばにいてくれるかぎり、世界の母と子はこれからもずっと助産婦の力を必要としていこう。